

投書にみるジェンダーと投書の社会的位置 —大企業の一連の不祥事をめぐる投書から—

熊谷 滋子

1. はじめに

新聞投書は誰でもどの新聞社にでも無料で投稿でき、意見や疑問を表現し、交換できるメディアである。戦後、民主主義を標榜する日本において、新聞投書の役割はますます高まってきている⁽¹⁾。新聞投書に関する調査研究は、投書史を通じて、又、投書内容の変遷などをめぐって試みられてきた⁽²⁾。

ところで、本稿では、現代の日本社会の大企業をめぐる投書を取り上げ、ジェンダーの視点から分析してみたい。膨大な投書から、大企業の廃業・事件・不祥事に関連した新聞投書にテーマを絞り、その文体と内容から考察していく。

かつて、私は山一証券自主廃業にまつわる新聞投書を調査している⁽³⁾。その論調は、高度経済成長を可能にした、「男は仕事・女は家庭」という大企業に典型的にみられる性別役割分業体制が存在してきたことを物語るものだった。具体的には、文体については、「ですます体」（丁寧体）は、女性では、（全女性投書中）4割が使用し、一方男性では（全男性投書中）1割が使用している。また、内容については、男性は企業・政府批判、女性では社員とその家族への励ましを中心に展開され、投書におけるジェンダーとしての特徴がみられた。

今回は、山一証券自主廃業を含め、その後におきた大企業をめぐる事件・不祥事（具体的には、2000年の雪印乳業による集団食中毒事件、2002年の雪印食品による牛肉偽装事件、2005年のＪＲ西日本の脱線事故）に関する新聞投書を対象に、文体や内容から、山一後から今日に至るまで、ジェンダーの変化がみられるのかどうか検討したい。そのうえで、大企業の体質とからめて、日本社会における現在の投書の位置づけについても探っていききたい。な

ぜ、当該企業に働く、当事者でもある社員からの投書がないか、といった問題である。

2. 大企業をめぐる事件・不祥事について

今回、調査対象としたのは、事態発生後、1ヶ月程集中的に掲載された大企業の事件・不祥事・事故をめぐる投書である。取り上げる事件について、手短かに説明しておきたい。

山一証券（以下、山一とする）は、1997年11月22日に、2600億円の巨額簿外債務、そして「飛ばし」による経営破たん、創業100年ともいわれる会社の自主再建を断念することを発表した。同月25日に、社長が、「社員は悪くありません」と涙の会見を行ったが、解雇者は、正社員が約7500名、契約社員が約1750名、就職内定の取り消されたものが490名である。新聞紙上の社会面での扱いは、経営陣への批判もさることながら、大企業においても終身雇用が叶わなくなってきたことを強調している点が特徴的である。

次に、雪印乳業の集団食中毒事件（以下、食中毒とする）は、2000年6月27日、雪印乳業の西日本支社に最初の苦情を告げる電話にはじまる。後に、洗浄不良から黄色ブドウ球菌が増殖した、大阪工場で作られた低脂肪乳の食中毒であることが判明した。雪印の対応の遅れから、1万人を超える被害者が発生したが、その後、同工場では返品された牛乳を再利用していたことも分かる。7月6日に社長が辞任し、21ヶ所の工場が一時操業停止状態となった。ブランドの牛乳とはいえ、衛生管理のずさんさにより、いとも簡単に信用を失墜した例となった。

3つめは、雪印食品の牛肉偽装事件（以下、牛肉偽装とする）である。2002年1月23日に、狂牛病対策として政府が行った国産牛の買い取り政策を悪用し、豪州産の輸入牛を国産と偽り、詰め替えをしていたことが、倉庫会社の内部告発によって発覚した。当初は、関西ミートセンターのセンター長の独断によるものとしていたが、2月に入り、本社も偽装に関与していたことが判明し、同月22日に社長が会社を法的に整理することを発表し、パートを含む全社員が解雇されることになった。これは、食中毒事件の2年後であり、

前回と違い「偽装」という意図的な行為に、雪印ブランドに対する信用がさらに大きく揺らぐことになった事件である。

最後は、2005年4月25日におきたＪＲ西日本宝塚線（福知山線）脱線事故（以下、ＪＲ西とする）である。電車がカーブを曲がりきれず脱線し、車両の一部がマンションの駐車場につっこむ大惨事となった。犠牲者は、死者107人、負傷者555人にもものぼり、さらに、車両がつつこんだマンションの全世帯が他への移動を余儀なくされた。この事故直後から、ＪＲ社員の対応の悪さ（居合わせた社員が救助活動をしないう、事件後にレクリエーションをしていた等）がマスコミに大々的に報じられ、ＪＲの乗務員への嫌がらせなどもおきた。利益優先の過密ダイヤとその中でやりくりをせまられる運転士へのいきすぎた管理教育（日勤教育）が問題視され、一方で日本社会全体の「遅れを嫌う」体質への反省がうながされるものともなった。

以上、簡単に４つの事態の概要をまとめた。調査対象としたのは、「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」に掲載されている、男女ともに投稿できる投書欄から、当該事件を話題としている全投書である。調査対象期間と投書数は、山一が1997年11月22日から12月31日までの57通、食中毒が2000年7月1日から8月30日までの47通、牛肉偽装が2002年1月23日から3月31日までの38通、ＪＲ西日本が2005年4月25日から6月30日までの55通であり、全部で196通となった。

３．数字からみる投書のジェンダー

まず、今回の投書について、男女の投書の「ですます体」の使用率と身内関係への言及（家族や親戚などに言及している）の度合いや、投稿者の性別、年齢、職業なども大まかに数字で追っていく⁽⁴⁾。参考のために、すでに調査したことのある戦後1955年から2004年までの数字（以後、この調査を「戦後」とする）と比較しながら考察していきたい⁽⁵⁾。

「戦後」の新聞投書の傾向として、女性の投稿数が増加している⁽⁶⁾。「ですます体」の使用率は、女性の方が（女性の全投書中）３割～４割と高く、男性の方は、特に1975年以降、（男性の全投書中）１～２割で、若干増加気味に

ある。同様に、身内関係への言及については、女性の方が2割～3割と高く、それに対して身内に言及する男性は、1997年以降になっても1割をこえる程度であり、女性の方が身近な人間関係から投書している。それでも、最近は、男女とも身内へ言及する割合が増えており、いわゆる身内志向になってきたといえる。

今回の大企業の投書の傾向を表にまとめる。

表1 大企業の不祥事をめぐる投書の特徴：投書比、文体、身内への言及等
() 内は%：投書数は全投書における割合、他は同性の全投書における割合
山一

	投書数	ですます体	身内への言及	当該社員の家族
男性	36(63.1)	3(8.3)	3(8.3)	1(2.7)
女性	21(36.8)	8(38.0)	8(38.0)	2(9.5)

食中毒

	投書数	ですます体	身内への言及	当該社員の家族
男性	25(53.1)	8(32.0)	0(0)	0(0)
女性	22(46.8)	9(38.0)	11(50)	2(9.0)

牛肉偽装

	投書数	ですます体	身内への言及	当該社員の家族
男性	24(63.1)	2(8.3)	0(0)	0(0)
女性	14(36.8)	6(42.8)	8(57.1)	0(0)

J R 西

	投書数	ですます体	身内への言及	当該社員の家族
男性	39(72.2)	14(35.8)	3(7.6)	0(0)
女性	16(29.6)	8(50.0)	5(31.2)	1(6.2)

表2 大企業の不祥事をめぐる投書の特徴：年齢
() 内は%：同性の全投書における割合

山一

代	20	30	40	50	60	70	80
男性	0(0)	3(8.3)	8(22.2)	5(13.8)	13(36.1)	5(13.8)	2(2.7)
女性	2(9.5)	7(33.3)	7(33.3)	5(23.8)	0(0)	0(0)	0(0)

食中毒

代	2 0	3 0	4 0	5 0	6 0	7 0	8 0
男性	1 (4)	1 (4)	4 (16)	3 (12)	8 (32)	5 (20)	3 (12)
女性	5 (22. 7)	7 (31. 8)	5 (22. 7)	2 (9)	2 (9)	1 (4. 5)	0 (0)

牛肉偽装

代	1 0	2 0	3 0	4 0	5 0	6 0	7 0
男性	2 (8. 3)	2 (8. 3)	1 (4. 1)	3 (12. 5)	2 (8. 3)	9 (37. 5)	5 (20. 8)
女性	1 (7. 1)	1 (7. 1)	3 (21. 4)	2 (14. 2)	6 (42. 8)	0 (0)	1 (7. 1)

JR 西

代	1 0	2 0	3 0	4 0	5 0	6 0	7 0
男性	1 (2. 5)	2 (5. 1)	6 (15. 3)	9 (23. 0)	7 (17. 9)	6 (15. 3)	8 (20. 5)
女性	0 (0)	2 (12. 5)	1 (6. 2)	5 (31. 2)	2 (12. 5)	5 (31. 2)	1 (6. 2)

表 3 大企業の不祥事をめぐる投書の特徴：職業

() 内は%：同性の全投書における割合

山一

	無職	主婦	会社員	その他
男性	13 (36. 1)	0	9 (25)	14 (38. 8)
女性	0	14 (66. 6)	3 (14. 2)	4 (19. 0)

食中毒

	無職	主婦	会社員	その他
男性	6 (24)	0	1 (4)	18 (72. 0)
女性	0	10 (45)	2 (9. 0)	10 (45)

牛肉偽装

	無職	主婦	会社員	その他
男性	9 (37. 5)	0	5 (20. 8)	10 (41. 6)
女性	0	8 (57. 1)	0	6 (42. 8)

JR 西

	無職	主婦	会社員	その他
男性	10 (25. 6)	0	13 (33. 3)	16 (41. 3)
女性	0	8 (50)	3 (18. 7)	5 (31. 2)

表1にあるように、投書数の男女比は、事件の内容により差がみられる。これは、いわゆる公的・私的領域、経済にかかわるか、食にかかわるかで男女差がでてきたとも思われる。食中毒では、特に子どもとかかわって、女性からの投書が少なからずあった。

文体について、「ですます体」は、女性の使用率が4～5割と高く、「戦後」に傾向的にみることのできた数値より高い。男性にはばらつきがあり、山一や牛肉偽装では1割以下、しかし食中毒とJR西では3割である。特にJR西については、男性では「戦後」最高の数値に上がり、事故の悲惨さ、被害者への哀切さが「ですます体」で表現するきっかけとなっているかもしれない。身内関係への言及については、女性が3～5割と圧倒的に高く、「戦後」の傾向に合致している。一方、男性は、「戦後」の上昇傾向とは異なり、1割弱であり、特に食中毒や牛肉偽装では1通もなく、女性が5割超えているのとは対照的である。さらに、このような事態の渦中にいると思われる当該企業の社員からの投書はない⁽⁷⁾。社員の家族として、つまり、妻、母、娘である女性からの投書は何通もあり、同様な立場の男性の投書は、父として（山一）の1通のみである⁽⁸⁾。女性の方が身内関係に引きつけて投書する傾向にある。男性でも、同様に身内が当該の企業に勤務している場合もあると思われるが、そのような男性からの投書が見当たらない。当該企業に勤める社員からの投書がないことの問題については、改めて後で言及したい。

また、今回の投書について、表2でまとめたように、投稿者の年齢については、男性は、40代～70代、細かくいえば、60代～70代が多く、いわば第一線を退いた人からの投書が目立つ。80代以上のものも5通ある。一方女性は、30代～50代が中心で、80代では1通もない。職業については、表3にあるように、男性は無職が2～4割弱と多く、会社員が1～3割でこれに続いている。女性は約半数が主婦からのものであり、パート、会社員と続く。その他には様々な肩書きの投書があるが、いちいち個別にあげずに一括して「その他」にまとめた。年齢や職業からみると、今回のテーマの投書については全体的に、当該企業に所属したことのない、もしくは、組織から一線をおいている人からのものが多いと言える。

4. 投書内容からみるジェンダー

投書の具体的な内容をめぐっては、批判、提言、励ましなどと、どれか一つに分類し、数字でまとめて示すことは難しい。しかし、その傾向にも、以下に示すようなジェンダーの特徴があり、具体的には付録の投書例を参考にされたい。

まず、山一に関して、男性の投書は経営陣に対する法的・金銭的責任の追及、公的資金導入への批判などが中心に行われ、大蔵省の管理体制、会計監査体制への批判がそれに続く。また、解雇を余儀なくされたことから、労働組合のあり方を問う投書もある。経験談として語られているものは、自身の不本意ながらの退職とその後の再就職や破たん寸前に私財をなげ出して組織の窮状を救った、とするような類の苦労話が主である。一方、女性の投書は、山一社員の対応（親切、不親切）や再就職の心配、社員の家族への励ましや同情が中心である。男性の投書にはみられない、「がんばって」と表現された投書が6通ある。また、一方で、山一という大企業や再就職では女性に不利であるとする男性中心社会への批判も、少ないがある。経験談は、夫の会社の苦境やリストラ、山一社員の対応をめぐる消費者としてのものが主である。自らの退職を経ったものも1通あった。まとめると、男性の投書は、組織への批判が中心であり、女性の投書は社員への励ましを中心である。

次に、食中毒と牛肉偽装についてみると、男性の投書は、食中毒の原因となつたずさんな管理体制への批判が中心に行われ、中には、安全衛生監督者としての厚生省の責任を問う声もあった。例として、付録の(1)の投書を参考にされたい。また、会社側のずさんな管理と違い、酪農家である生産者側は日夜、品質管理をいかに徹底して行なっているかが紹介されている。牛肉偽装では、表示の裏切りや利ざやを稼ぐことへの批判が中心で、さらには、今回の事件が発覚するきっかけとなつた内部告発者に対する保護の提案が5通あった。経験談は、(かつての)仕事上の品質管理の厳しさをプロとしていかにか全うしてきたかを語ることで、雪印への批判としている。女性の投書は、男性と同様にずさんな管理体制や表示の裏切りへの批判が多いが、それと同じくらい、当該会社の社員（家族や雪印所属の運動選手を含む）への励まし

が多い。例として、付録の(2)の投書を参照されたい。さらに、酪農家や牛乳の販売店の「おばちゃん」、「偽装と関係のないまじめに働く」社員が解雇されることへの同情がある⁽⁹⁾。山一でみられた「がんばって」という表現も2通ある。ちなみに、販売店に関し、男性の投書では、食中毒事件後、空き瓶の回収を忘れないようにとの苦言を呈するものがある⁽¹⁰⁾。経験談は、牛乳、牛肉を買う消費者としてのものが中心であり、その他は、夫がリストラ後、苦労の末、再就職した話を介して、社員への励ましを述べようとするものである。まとめると、男性の投書は批判や内部告発への関心が主であり、仕事上の経験・体験から意見を述べている。一方、女性は批判と同時に、消費者としての体験や夫のリストラを通じて得た体験を社員への励ましの言葉として綴ろうとしている。

最後に、J R 西の脱線事故では、男性の投書は、効率優先の企業経営に対する批判が圧倒的に多く、中には、民営化による悪影響を指摘するものや国交省の責任を問うものもあった。また、「遅れを嫌う」日本社会への警鐘も含まれている。さらに、事故の犠牲者をあまりにクローズアップし、お涙頂戴式の感情的な報道や、事柄の本筋ではないことを過剰に書きたてるメディアの姿勢を問う声もあった。経験談には、運転士としての経験（オーバーラン）や、忙しさの中で大事故を引き起こしそうになった医師の体験、医者への育成などにも共通する専門技術の継承の重要性を訴えるものがあった。女性の投書は、男性と同様に、効率を優先する企業への批判や車両の軽量化の問題、また、ちょっとした遅れを気にしすぎる日本社会への問い直しが中心であるが、それと同じくらい、J R 西日本の社員をめぐるものがあった。山一や食中毒、牛肉偽装とは違い、J R 西日本の社員を励まそうとする投書はなかったが、事故後の社員の対応のまずさから、（上司からの命令でしか動かない）社員の体質の問題や、社員への嫌がらせに対する非難があった。経験談では、身内がかつて鉄道事故で死亡したことや利用者としての体験が述べられていた。まとめると、男性はJ R 西の企業経営に対する批判が中心であり、女性は批判と並んで社員をめぐるものとなっている。

全体として、山一(1997) から J R 西(2005)までの大企業関連の投書にみる

ジェンダーの特徴は共通している。男性は批判する側、もしくは仕事の体験者としての立場からの発言が中心であり、組織や管理体制の責任を追及している。いわば、公的領域への関心が高い。一方、女性は、男性と同様な批判や意見を主張しつつも、それと同じくらい、いやそれ以上に、(自身は仕事についていないという前提で) 当該企業の社員（や関係団体）への励ましや同情など、人間に対する関心をよせている。いわば、私的領域からの関心が高いといえる。本来ならば、性にかかわらず、両方への関心がもてることが望ましいが、今でも投書に、男女の分業体制が反映していると思われる。

さらに、先述してきたように、第一線を退いた人や当該企業に所属していない人が、投書する傾向がある。そのため、投書で展開される批判の仕方もややもするとパターン化し、「なぜこんなことになってしまったのか」式の、上層部への責任追及がもつばらで、抽象的な議論に陥りがちな印象がぬぐえない。しかしその中でも、牛肉偽装では、内部告発制度を具体的に求める投書が現われ、変化の兆しもうかがえる。重要な問題とも思えるので、少々敷衍しておこう。

日本の企業では、いやどこの職場でもだが、内部告発制度がないと、働くものがなかなか物が言えないのが実情であろう。上述の牛肉偽装事件では、当初、関西ミートセンターのセンター長の独断だと発表されたが、その後本社も関与していることが判明した。日本の企業の組織体質からみれば、はじめから一センター長の独断とは思えなかった。37歳のアルバイト男性は投書で、センター長の行為は許せないことだが、自分自身がその場にいたら、「妻をかかえ」リストラされる覚悟で、上層部へ勇気を持って反対できたか、と鋭い問題をなげかけている（『毎日新聞』2002年2月6日付）。一方で、息子が雪印乳業に勤務する母親の投書には、「チャンスが頂けた時は、上司が『黒』と言っても、『白』と主張できる社員にな」るように息子に伝えたことが書かれている（『朝日新聞』2002年1月25日付）。その後日談として、雪印食品の幹部からその息子の勤め先に「本当に素晴らしいことを書いてくださった」と電話のあったことを社会面で報じている（『朝日新聞』2002年2月6日付）。事件がおおっぴらになった後は、このような「美談」がまかり通る。厳しい

ことをいうようだが、自分がセンター長の立場にあったら、あるいは、一家の大黒柱であったとしたら、同じようなことを主張できるだろうか。

5. 日本における投書欄の社会的位置づけ

山一(1997)からJ R西(2005)までの大企業の事件・不祥事をめぐる投書を主にジェンダーの視点から検討してきたが、そこには、一貫して、当該企業の社員からの投書は皆無であり、社員の家族である女性からの投書がいくつかあるだけであった⁽¹¹⁾。何故、新聞の投書欄は、いわば渦中の人が書けない・書かない状況があるのだろうか。再三指摘してきたことだが、投稿者の傾向として、男性なら無職、女性なら主婦が多く、外からものが言いやすい人たちである。例えば、J R西の場合、運転士として休みも十分とらないまま勤務させられている息子の母親からの匿名の投書があった。ジェンダーからみると、女性は、男性に比べて、会社・組織の外から、家族などの身内などを含めた人間関係から投書する傾向がある。そのためか、当該企業の社員を家族にもつ場合にも、投書することがある。しかし、男性の場合は、より組織の内側にいて、人間よりは組織・体制に目を向ける傾向にあるため、当該企業の社員を家族にもついても、そのことで投書しない。ある意味で、男性の方が体制や組織に、より管理されているということかもしれない。

注7で確認したように、女性のみが投稿できる欄には当該企業の社員である女性が投書している例があるが、男女ともに投書できる欄においては、繰り返してきたように、当該企業の社員は男女ともに投書しない。見田宗介(1984:4-5)は、1962年に「読売新聞」に掲載された身上相談を分析しながら、身上相談には現われない人のタイプを整理している。今回の投書を不在という点からみても、新聞社の編集の方針もあるだろうが、当該企業の社員からの投書は(匿名でも)現われてこない。

森岡孝二(2005:9)は、投書では「多忙や疲労で自らの状況に声を上げる余裕すらない男たちに代わって、母親や妻が」働きすぎを訴えていると指摘しているが、はたして、「多忙や疲労」だけなのだろうか。新聞紙上の社会面では当該企業の社員が記者にインタビューを受け、会社について不十分とはい

えなにかしら語り、それが報道されもしている。しかし、なぜ自分からは書かないのだろうか。川人博(1998:83-87)は、いじめで自殺した少年たちがいじめた本人たちを名指しで責めている遺書とは対照的に、家族や会社へのおわびと自分を責める言葉が目立つ過労自殺者の遺書の特徴を鋭く論じている。今回の投書にも同じように、私は、「会社人間」として養成され、労働している日本の労働者の哀しい姿が読みとれると思う。日本の会社組織の徹底した管理が、働く者一人ひとりの心までも支配してしまうという構図である。上に逆らえない、逆らわない、もしくは、身内の恥をださないという、中根千枝(1967)の論じる「タテ社会」が今でも、こういう形で日本に健在していることの証ではないだろうか。

投書と組織とのかかわりで、身内(組織)のことを外部(投書など)へ出すという圧力がある。例えば、旭川地裁の判事補による実名の投書が「朝日新聞」に掲載されたが、そのことで、その判事補が旭川地裁所長から裁判所の信頼を損なわせるとして「注意処分」を受けたとする報道があった(「朝日新聞」1997年12月17日付)。そのことについて、ある識者は「意見を述べたもので、よほど人間的で健全だ」とコメントしている。また、JR西の脱線事故後、5月13日付で姫路列車区長が同区の運転士と車掌約200人に、「会社内外を問わず、事故又は事故に関連して会社のことを公言することを慎むこと」などの文書を配り、署名・なつ印後、提出させていたことが判明した(「毎日新聞」2005年5月18日付)。直接投書についてふれているわけではないが、「公言」の中には、当然投書も含まれていると解釈できるだろう。このように日本の組織は陰に陽に、内部のことを外に出さないように、圧力をかけ続けている。

本稿の冒頭で述べたとおり、投書は「誰でもどの新聞社にでも無料で投稿でき」るものというのは、実はタテマエであり、実態は、組織内のことは外に言いにくい状況、ましてや投書などできない状況があるといえる。そのためか、かつて当該企業にいたが、解雇されて別の組織に移った後に、その後の心境を「元〇〇(企業名)」と表明しながら述べる場合も出てくる。例えば、元山一の社員であったとする投書が3通あり、いずれも解雇後であり、再就

職を果たしたり、定年を迎えてからのものである⁽¹²⁾。それも他の「元山一」社員との一体感を共有しながら、今後をそれなりに生きていこうとする心境を綴るもので、山一への怒りなどは、川人博の指摘のように、全くでてこない投書である。

まとめると、日本における投書欄の状況として、組織の外にあり、身内や人間に関心を持つ人として、当該企業の社員を家族にもつ女性（母、妻、娘）からの投書はあるが、より組織に管理され、組織に反応する、当該企業の社員を家族にもつ男性（父、夫、息子）からの投書はほとんどない。この点にジェンダーがみえてくる。さらに、当該企業の社員からの投書は、男女問わず、現れてこないことも確認できた。

6. おわりに

今回は、大企業をめぐる事件にかかわる投書について、文体や身内への言及率、投稿者の男女比や年齢、職業や投書内容などからジェンダーをみてきたが、さらに当該企業の社員を家族にもつ投稿者のジェンダー的特徴も確認できることを指摘した。

そして、最後に、日本の投書欄では、当該社員からの投書は男女ともに皆無であることを指摘した。ここに、日本の投書欄の社会的位置づけがみえてくる⁽¹³⁾。

寿岳章子(1979:194-201)は、「かなんことはかなんと言おう、自分が変わらんことには人は変えられん、一番言いにくいことを一番言いにくい人に言おう」というメッセージを伝えている。長年交流してきた丹波の女たちが、その大変な生活の中から絞り出したことばである。これらの力強い表現は、今回取り上げた大企業で働く組織人間にも十分必要であり、投書欄もこのような思いを伝える場にするためには、どのような条件が必要となるのか、今後考えていくべき課題の一つである。

注

(1) 投書欄のもつ「公共性」ということも語られるようになってきた（酒井信一郎、2005

年第16回社会言語科学学会大会プログラムより)。

- (2)例えば、西村典子(1998)では、投書史について詳しく書かれている。
- (3)詳しくは、熊谷(1999)を参照されたい。
- (4)投稿者の性別は、名前と肩書きから判断したが、判断できないものは除外した。
- (5)具体的な表などは、熊谷(1999)を参照されたい。
- (6)「朝日新聞」の場合、1956年と2003年における投稿数を単純に比較すると、女性は7倍も増加しているが、男性は2倍にとどまっている。
- (7)当該社員からのものは、女性のみが投稿できる「ひととき」欄(「朝日新聞」)に掲載されたものだけである(1997年12月4日付)。
- (8)食中毒について、雪印社員の家族からの手紙が一面に2通掲載されたが、そのうちの1通は夫の過酷な労働実態を綴った妻からのものである(「毎日新聞」2000年7月12日夕刊)。その後、その手紙に同情した投書があった。
- (9)「雪印販売店のおばちゃんへ」(「朝日新聞」2000年7月19日付)と題する女性(44歳)からの投書がある。
- (10)「空き瓶の回収は忘れないで」(「読売新聞」2000年7月25日付)と題する男性(51歳)からの投書がある。
- (11)熊沢誠(1994:26-27)は、「夫の会社中心の生活に妻や母親一女たちの投書が多い」と指摘し、その意味を考えている。
- (12)「朝日新聞」では、47歳女性のもの(1998年5月3日付)と41歳男性のもの(1998年12月29日付)、「読売新聞」では、62歳男性のもの(2000年7月20日付)などがある。
- (13)投書で主任制反対を訴えた、教員であった母親と違い、教育現場において、納得できないことが横行しているにもかかわらず、母のように投書ができないと悩む、教員をしている娘からの投書があった(「亡き母と違い投書できずに」「朝日新聞」2005年10月18日付)。企業に勤めていなくても、投書によって物を言うことが困難であることを示している。

参考文献

川人博(1998)『過労自殺』岩波新書。

熊谷滋子(1999)「山一証券自主廃業をめぐる新聞投書にみるジェンダー」『人文論集』第50

号の1 静岡大学人文学部 pp. 145～163。

熊沢誠(1994)『働き者たち 泣き笑顔』有斐閣。

寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波新書。

見田宗介(1984)『新版現代日本の精神構造』弘文堂。

宮坂純一(2005)『ステイクホルダー行動主義と企業社会』見洋書房。

森岡孝二(2005)『働きすぎの時代』岩波新書。

中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社現代新書。

西村典子(1998)『投書のすすめ』文芸社。

付録 (投稿者の住所、氏名、年齢、職業等は省略した)

- (1)「雪印乳業は消費者の信頼裏切った」(男性「毎日新聞」2000年7月6日付)

雪印乳業大阪工場(大阪市都島区)で製造された低脂肪乳を飲んだ人がおう吐や下痢などの食中毒症状を訴え、5日までに1万人を超える人に被害が出たという。

その原因は、製造ラインの黄色ブドウ球菌だということである。

製造工程にあるバルブを、1週間に最低1回は洗浄すべきところを、3週間も洗浄しなかったため、黄色ブドウ球菌が繁殖したことが明らかになった。

大手乳製品メーカーとして、絶対にあってはならないことである。大手乳製品メーカーの製品だから、衛生面は絶対に安全だ、と信用していた消費者を裏切ったと言わざるを得ない。

雪印乳業が許されないことは言うまでもない。だが、監督官庁はもっと監視を十分にすべきだったにもかかわらず、それを怠った。

大阪市は、やっと食品衛生法に基づき雪印乳業大阪工場を営業禁止処分にしたが、当然である。

- (2)「我が家に謝罪に来た雪印社員」(女性「毎日新聞」2000年7月21日付)

今回の雪印集団食中毒事件で、中学2年の我が家の息子も程度は軽いものの被害者となった。

発症が早期のころで、まだ報道もされておらず、病院で抗生物質と整腸剤を処方してもらい、2、3日で全快した。

しかし、その後のさまざまな報道で、あまりにもずさんな現状を知り、本当に腹が立った。会社のトップの記者会見での発言や態度に接するたびに、こんな会社の製品は二度と買うまいと思った。

けれど、炎天下、我が家に謝罪に来た社員の姿に、胸をつかれる思いがした。東京本社から大阪へと、謝罪のために駆り出されているそうで、ひたすら頭を下げて回る若い社員の姿に、数年後の息子の姿を重ねてしまった。

あなたの会社がしてしまったことは、本当に悪い。そのためにあなたはこうして頭を下げて回っている。このことを決して忘れず、もう二度とこんな思いをしないように頑張ってください。私は、そう心の中でつぶやいた。

(くまがい しげこ)